

I 私が選んだっておきの歴史書

日本を代表する歴史学者・歴史通が選ぶ、
中世・近世史の神髄にせまるための5冊とは？

清水克行

(歴史家)

未完に終わった
日本史の名著

室町ブームの火付け役と称されている
歴史家・清水克行は、本誌、高野秀行との
読書会対談でもおなじみ。
講義が人気の大学教授であり、
書評家としても活躍している。
本稿では歴史書の選び方を指南するとともに、
残念ながら絶筆となってしまう、
壮絶な名著を紹介する。



石井進「中世のかたち」に登場する「針磨」(右)と「念珠ひき」の絵。土佐光信(1434?~1525年?)が描いた『職人尽歌合』の江戸時代の模本より。(模本作者:狩野晴川、勝川 東京国立博物館所蔵) Image:TMN Image Archives

歴史の勉強をしたんだけど、どんな本から読みはじめればいいのか、わからない……。これは初学者によくある悩みではないかと思うが、こういうとき、私は「誰でもいいから好きな歴史家を一人見つけて、その人の本を端から徹底的に読んでみては？」とアドバイスすることにしている。まずは自分の独断と偏見を信じて、「歴史書」ではなく「歴史家」のファンになってしまうのが案外、勉強の近道なのだ。

自分がファンになった学者の本を次々と読み進めていくうちに、その人が決まって引用する研究者(恩師や先人)や、その人が決まって批判する研究者(論敵)も次第にわかってくるだろう。そうしたら、しめたもの。次はそうした学者にも読書の幅を広げていけば、知らないうちに研究の現状がわかってくる。最初にハマった学者の主張は意外にもある大家の先生の二番煎じであったり、論敵となっていた研究者の言いつのほうがかえって正しかったり、ということに気づいて、独断と偏見は自然に修正されていくものだ。

歴史学というのは「科学」的な手続きを踏まえて行われる学問ではあるが、一方で歴史学者個人の人生や価値観が反映されやすい学問であり、そこが学問としての危うさでもあり魅力で

もある。だから、歴史書を読むなら、そこに描かれた史実だけではなく、ぜひそれを書いた歴史学者にも注目してもらいたい。名著と言われる歴史書ほど、必ずそれを書いた歴史学者のとなりが反映されている。まして、稀代の歴史学者がその生涯の最後に書いた本には、よくも悪くも、その全人格が凝縮されていると言えるだろう。ここでは日本史の名著の中でも歴史学者がその生涯の最後に著した本、しかも不幸な事情で絶筆、未完となってしまった隠れた名著を紹介することにしたい。

生活文化誌としての「倭人伝」

まず古代史からは、佐原真さばらまこと『魏志倭人伝の考古学』をオススメしたい。「魏志倭人伝」と言えば、言わずと知れた二・三世紀のわが国に存在した邪馬台国について記した中国文献。このわずか二〇〇〇字足らずの史料の解釈をめぐる、いまだに論争が繰り返され、数多くの邪馬台国関係の書籍が刊行されている。本書の著者・

佐原真(一九三二~二〇〇二年)は、九〇年代の考古学界を率いた人物で、特に考古学を一般読者に「やさしく、楽しく、普及させることをモットーにして、数多くの一般向けの書籍を著

した。最晩年はがんに冒され闘病生活を余儀なくされたが、その彼が病床で最後まで心血を注いだのが、本書の執筆であった。

本書が通常の邪馬台国本と大きく異なるのは、「倭人伝」にわずかに記された倭人の生活習俗に着目し、それを考古学の成果とつき合わせながら、「いれずみ」「生菜」「坐り方」など二八項目にわたって解説している点である。邪馬台国本と例えば、畿内か北九州か、はたまた何処か、という話ばかりが飽きもせず繰り返されているが、あえてそこには触れず「倭人伝」を生活文化誌として読むという切り口は斬新である。残念ながら著者の死により執筆は中断され、当初の執筆予定だった四〇項目のうち、書き上げられたのは二三項目だけだったが、友人の歴史学者により原稿は既発表の旧稿も交えて再編集され、一書として読むには何ら問題のない形態となっている。小品だが、その内容は著者にしか書けないもので、まさに佐原考古学の総決算と呼ぶにふさわしい遺著と言えるだろう。

ファンティックな熱量で描く帝王の生涯

遺著ということで言えば、より壮絶なのは、棚橋光男たなはしみつお『後白河法皇』だろう。著者(一九四七